

# 久保A遺跡発掘調査概要報告書・I



平成14年 3月

熊取町教育委員会

## は し が き

古代から熊取野とよばれた本町域は現在まで変わることなく「熊取」として独立した地域を保持し、恵まれた自然と文化を今日に伝える町であります。

町内には重要文化財中家住宅をはじめ有数の文化財が知られますが、他に42カ所を数える埋蔵文化財包蔵地があります。

熊取町教育委員会では皆様の御協力と御理解を得ながら毎年50件程の緊急発掘調査を実施し、この十数年間の埋蔵文化財発掘調査で多くの資料を得ています。

本書は平成12年度に熊取町小谷地区の町道小谷穴釜線の新設に伴って実施した発掘調査の報告書として作成したものです。この資料が今後多方面の研究に役立てられることを願っています。

最後になりましたが、本年現地での発掘調査にあたって御協力をいただきました土地所有者ならびに関係者各位に対しまして紙上をお借りし厚くお礼申し上げます。

平成14年3月

熊取町教育委員会  
教育長 甲田 太三郎

## 例 言

1. 本書は、熊取町事業部道路課による町道小谷穴釜線新設工事に伴って平成12年度に熊取町教育委員会生涯学習推進課文化財係が実施した久保A遺跡発掘調査における概要報告書である。
2. 調査は、熊取町教育委員会生涯学習推進課文化財係考古学技師前川 淳を担当者として、平成12年7月10日に着手し、平成12年8月10日に終了した。  
確認調査では、調査区をカラーフィルムと白黒フィルムで撮影し、平板で調査区位置図(平面図)を作成、調査区壁面図を作成し、記録にとどめた。また測量作業後は必ず埋め戻して現場作業を完了した。
3. 本書における図面の標高は、T. P.(東京湾平均潮位)を用いた。また方位は、地図以外については磁北を示すこととした。
4. 本書における図面の土色は、『新版標準土色帖』第10版(小山正忠・竹原秀雄編、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修1990年度版)を用いて目視により比定した。
5. 本書の作成及び現場での発掘作業にあたっては、熊取町事業部道路課および工事関係者の協力を得た。
6. 本書の作成及び発掘現場での作業にあたって、下記の調査員・調査補助員・作業員の参加を得た。  
池上裕也、尾上智史、石松 直、関井澄子、前田公子、山本恵子  
宇沢克之、太田敏治、岡本利市、坂本善成、橋本松雄、平阪博司
7. 発掘調査現場で使用した機械類は、株式会社竹口文化財から借上げた。
8. 本書の執筆は熊取町教育委員会生涯学習推進課文化財係考古学技師前川淳が行った。

# 目 次

## 第1章 地理的環境と周知の遺跡

第1節 熊取町の地理的環境 .....	1
第2節 熊取町の歴史的環境 .....	1
第3節 周知の遺跡 .....	3

## 第2章 調査の経緯

第1節 久保A遺跡について .....	4
第2節 付近の環境 .....	4
第3節 調査の契機 .....	5
第4節 確認調査 .....	5

## 第3章 調査成果の概要

第1節 久保A遺跡00-1区の調査区域の設定 .....	6
第2節 C調査区 .....	7
第3節 A調査区 .....	8
第4節 B調査区 .....	14

## 第4章 遺物

第1節 瓦器 .....	15
第2節 土師器 .....	17
第3節 須恵器 .....	17
第4節 陶磁器 .....	17
第5節 遺物の遺構別の報告 .....	18

## 第5章 まとめ

第1節 まとめ .....	20
第2節 熊取の中世について .....	20
第3節 考察 .....	21
第4節 備考 .....	22

# 第1章 地理的環境と周知の遺跡

## 第1節 熊取町の地理的環境



熊取町は大阪府泉南地域の中央に位置し、貝塚市・泉野市の両市に囲まれた町である。町域は東西約 4.8km、南北約 7.8kmと南北に長い木の葉状を呈している。町域の総面積は約 17.19km<sup>2</sup>を有する。地形による面積比を見ると、山地 41%、丘陵 24%、段丘 23%、低地 12%に区分され、山地・丘陵部が町域総面積の約3分の2を占めている。地域別に見ると、町南部においては、泉南地域の基本山地の和泉山地から派生する和泉丘陵とその縁辺部に発達する段丘部が多くを占めている。また北部では狭小ながらも河川の対岸に洪積地が形成されている。町域に水源を持つ河川は雨山川・和田川・大井出川・見出川の4水系が存在している。いずれも町南部の山間部を水源としており南部から北部へ向かって流下し、泉野市を経て大阪湾に注ぎ込んでいる。本町が瀬戸内式気候区の東端に位置しているため

に年間降雨量が少量であることから、古くから町域一帯に多くの灌漑用の溜め池を目にすることが出来る。

## 第2節 熊取町の歴史的環境

町内の遺跡は現在41カ所を数える。

縄文時代以前の遺構は発見されていないが、東円寺跡の所在する熊取町野田の町立中央小学校で縄文時代早期の有舌尖頭器と石鏃が検出されているので、東円寺跡は縄文時代からの複合遺跡である。

弥生時代の遺跡も発見されていない。JR熊取駅のある大久保における駅前整備事業に伴う平成元年の発掘調査では畿内第V様式を示す土器が大量に検出され大久保E遺跡となったが、その土器は古墳時代初頭の所産と考えられている。

古墳時代の遺跡として、町中央部の山の手台住宅に五門古墳と五門北古墳が記されているが、これらは開発で消滅している。しかし開発では副葬品や古墳の石材等が発見されたという報告もなく、これらが古墳であった可能性はほとんどないといわれている。

飛鳥時代については、平成10年度の大久保城跡98-1区の調査で複数の溝が検出され、その中から飛鳥V様式といわれる土師器や須恵器が出土した。

奈良時代についてはこれまで東円寺跡87-1区の調査で建物4棟と土壌、須恵器、土師器が検出されたのみにとどまっていたが、平成11年7月熊取町七山で西暦750以降の奈良時代を示す多くの須恵器が宅地開発の発掘調査で検出され、熊取町第41番目の「七山東遺跡」となった。

平安時代については、野田の熊取町役場付近に想定されている東円寺の創建が、発掘調査で発見された軒瓦の比較研究から平安時代末とされている。また平成8年度には大久保

# 熊取町遺跡分布図



から紺屋にかけての私立病院の発掘調査で黒色土器や須恵器、土師器が自然流路内から検出されている。

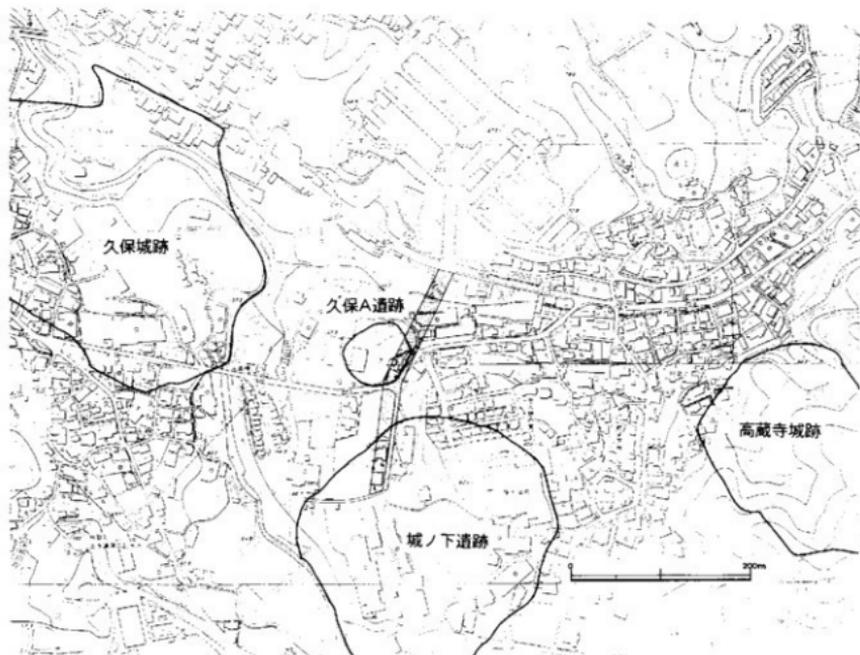
鎌倉時代以降中世に関しては、熊取町内の遺跡のほとんどが同時代を中心とした様相を示している。野田の東円寺跡、久保の久保城跡、大浦の大浦遺跡、紺屋の紺屋遺跡、七山の七山東遺跡では瓦器を豊富に含む包含層が存在しており、建物・溝といった遺構も検出されている。

江戸時代に関しては、町内には重要文化財中家住宅や降井家書院等の江戸時代の様式を示す有形文化財が残っている。これらの旧家は現在の熊取町の様々な事柄の基礎を築いた熊取町の歴史上重要な旧家であるため、旧敷地内やその周辺の発掘調査は特に重要である。周辺地での調査ではこれまで近世陶磁器が数多く出土している。

### 第3節 周知の遺跡

No.	周知の遺跡名	種別	時代	地目	立地	主な成果等
1	降井家書院	建造物	室町～江戸	宅地	平地	国指定重要文化財
2	中家住宅	建造物	室町～江戸	宅地	平地	江戸期から明治前期の陶磁器等出土
3	来迎寺本堂	寺院	鎌倉	宅地	丘陵腹	15～16世紀の土師器を検出
4	池ノ谷遺跡	散布地	田石	水田	平地	
5	甲田家住宅	建造物	江戸	宅地	平地	
6	東円寺跡	寺院跡	弥生～江戸	宅地	平地	縄文・奈良・鎌倉～室町・江戸の複合遺跡
7	城ノ下遺跡	城郭跡	室町	宅地	丘陵	
8	成合寺遺跡	墓地	室町	畑地	丘陵腹	14世紀代の600基以上の土塚墓群等検出
9	高蔵寺城跡	城郭跡	室町	山林	山頂	土塚・堀切等の構築物を確認している
10	雨山城跡	城郭跡	鎌倉	山林	山頂	月見ノ亭・馬場・千疊敷の地名が残る
11	五門遺跡	散布地	古墳～江戸	宅地	丘陵	須恵器等を採取するも現在消滅
12	五門北古墳	古墳	古墳	宅地	丘陵	古墳参考地、現在消滅
13	五門古墳	古墳	古墳	宅地	丘陵	古墳参考地、現在消滅
14	大浦中世墓地	墓地	室町	雑地	平地	享徳4年銘(1445)の五輪塔の地輪出土
15	久保城跡	城郭跡	鎌倉	水田	平地	的場・矢ノ倉等の字名、瓦器片多数出土
16	山ノ下城跡	城郭跡	鎌倉	宅地	平地	
17	大谷池遺跡	散布地	古墳～江戸	池	平地	
18	森礼御旅所跡	祭礼跡	室町	山林	丘陵	五門・紺屋共同墓地
19	正法寺跡	寺院跡	鎌倉	宅地	丘陵	
20	小垣内遺跡	寺院跡	江戸	道路	丘陵	毘沙門堂跡、現在消滅
21	金剛法寺跡	寺院跡	室町	宅地	平地	大森神社神宮寺、現在消滅
22	島羽城跡	城郭跡	室町	山林	丘陵	
23	池ノ谷遺跡	寺院跡	室町	山林	丘陵腹	
24	花成寺跡	寺院跡	室町	山林	丘陵	
25	降井家屋敷跡	屋敷跡	室町～江戸	宅地	平地	敷地を区画する溝や江戸初期の陶磁器等
26	大久保A遺跡	散布地	江戸	宅地	平地	
27	下高田遺跡	集落跡	鎌倉	田	平地	
28	大久保B遺跡	集落跡	弥生～江戸	宅地	平地	弥生末～古墳初中心の遺物出土
29	紺屋遺跡	散布地	古墳～江戸	宅地	平地	奈良～平安期の河川跡検出
30	白地谷遺跡	散布地	室町～江戸	田	谷	
31	大久保C遺跡	散布地	室町～江戸	宅地	平地	
32	千石堀城跡	城郭跡	室町	山林	丘陵	天正年間(1573～92)雑賀衆等の城跡
33	口無池遺跡	散布地	平安～江戸	宅地	平地	平安末～鎌倉初の遺構・遺物検出
34	大久保D遺跡	散布地	鎌倉～江戸	宅地	平地	
35	大浦遺跡	散布地	鎌倉～江戸	田	平地	13～14世紀の瓦器等出土
36	久保A遺跡	散布地	鎌倉～江戸	宅地	平地	
37	大久保E遺跡	集落跡	弥生～江戸	宅地	平地	弥生末～古墳初の遺物多数出土
38	久保B遺跡	集落跡	鎌倉～江戸	宅地	平地	13～14世紀の瓦器等出土
39	中家住宅周辺遺跡	集落跡	室町～江戸	宅地	平地	江戸期以降の陶磁器等多数出土
40	朝代北遺跡	散布地	鎌倉～江戸	宅地	平地	鎌倉時代以降の遺物の包含層
41	七山東遺跡	散布地	古墳～室町	宅地	平地	奈良時代の須恵器を多量に含む包含層
42	小垣内西遺跡	集落跡	奈良～室町	宅地	平地	幅10m以上の溝、瓦、柱跡など

## 第2章 調査の経緯



### 第1節 久保A遺跡について

久保A遺跡は熊取町の中東部、貝塚市水間寺に抜ける水間街道が通る小谷集落と熊取町大森神社が鎮座する久保との境界に存在する総面積1,000㎡に満たない小さな範囲の散布地遺跡である。

埋蔵文化財包蔵地外であった熊取町大字小谷99-1他1筆において、平成2年1月8日倉庫の建設事に伴って埋蔵文化財試掘調査を実施したところ、中世の遺物と包含層を発見したため、熊取町で第35番目の久保A遺跡として周知されるに至った遺跡である。

### 第2節 付近の環境

本遺跡の現状は熊取町小谷に接する宅地および道路、一部畑地となっている。また地理的には小谷地区に組み込まれている感がある。小谷集落の西南後方に高蔵寺山(丘陵)があり、14世紀に大内氏もしくはその被官による築造の高蔵寺城があったとされているが、小谷集落内や周辺の平地部分にはこれまでめぼしい遺跡が見つかっていない。そういった中で久保A遺跡は重要な地理的位置を占めていると思われる。

### 第3節 調査の契機(文化財保護法第57条の3第1項に基づく通知)

申請者：熊取町(道路課)

事業名：町道小谷穴釜線道路改良事業

事業内容：町道小谷穴釜線は熊取町外環状線R-トの一端を担う重要な路線であり、国道170号線から熊取町総合体育館等スポーツ振興拠点及び熊取町南部地区大規模開発へのアクセス道路として、町南東部の道路ネットワークを形成するの主要幹線道路であり、整備の急がれる路線である。

受付日：平成12年1月14日

所在地：熊取町大字久保24-7～久保147-2地先

遺跡の種類：散布地

遺跡の名称：久保A遺跡

進達の副信：発掘調査

周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事についての通知(大阪府教育委員会)

平成11年 月 日付け 教委文第1-4362号

通知内容：発掘調査

### 第4節 確認調査

<第1次：平成12年1月14日～1月17日>

調査手段：機械掘削

トレンチの数：7本(帯状：平均2×6m程度)

調査結果：トレンチ1～トレンチ5からは埋蔵文化財を検出しなかった。

トレンチ4では黒褐色土層を検出、古代の包含層の可能性があると判断した。

調査後処置：本発掘調査

トレンチ4付近の約58.4㎡(→久保A遺跡00-1区・C調査区)を対象にして、平成12年度の初夏頃着手を目的に本調査を計画。

<第2次：平成12年7月15日～8月29日>

図のうち、A調査区とB調査区が設定された場所は既設の工場が存在していたことから、道路建設着工直前まで用地買収できないなどの事情があり、上記第1次確認調査時にはトレンチ掘削を実施できず、C調査区の本調査時(平成12年6月26日～)にあらためて確認調査のトレンチを開ける計画としていた。

調査手段：機械掘削

トレンチの数：3本(帯状：平均2×6m程度)

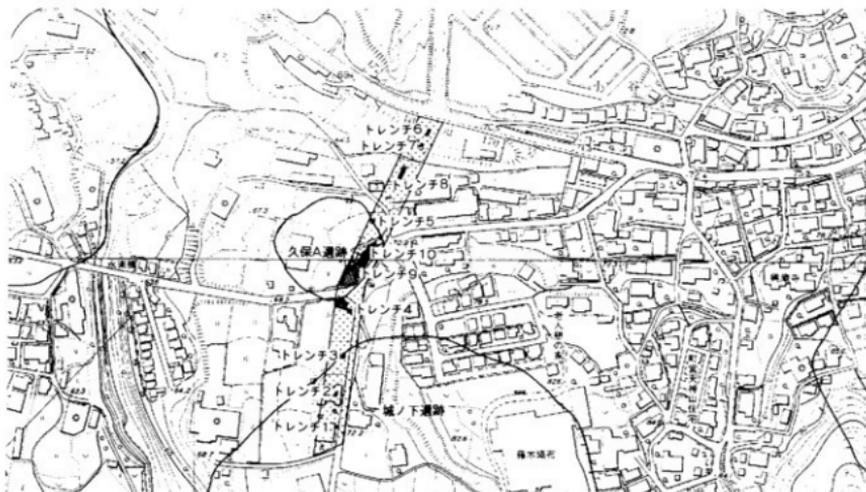
調査結果：トレンチ9において中世の柱穴と考えられる遺構を確認した。

調査後処置：本発掘調査

約213.5㎡を対象とした本調査を実施して、小谷穴釜線道路新設工事で破壊される埋蔵文化財を記録保存する措置を講じた。

### 第3章 調査成果の概要

#### 第1節 久保A遺跡00-1区の調査区域の設定



本調査を実施したのはC→A→Bの順に3調査区である。

A・B調査区では、第2次確認調査で得たデータを基に、GL面よりマ付0.7m付近に検出面(遺構面)を設定した。GLよりマ付0.5mまでは埋蔵文化財が皆無もしくは希少であることから機械掘削で迅速に土砂を排除し、遺構面までの残り0.2m分は包含層として人力掘削し、遺物の検出に努めた。



## 第2節 C調査区

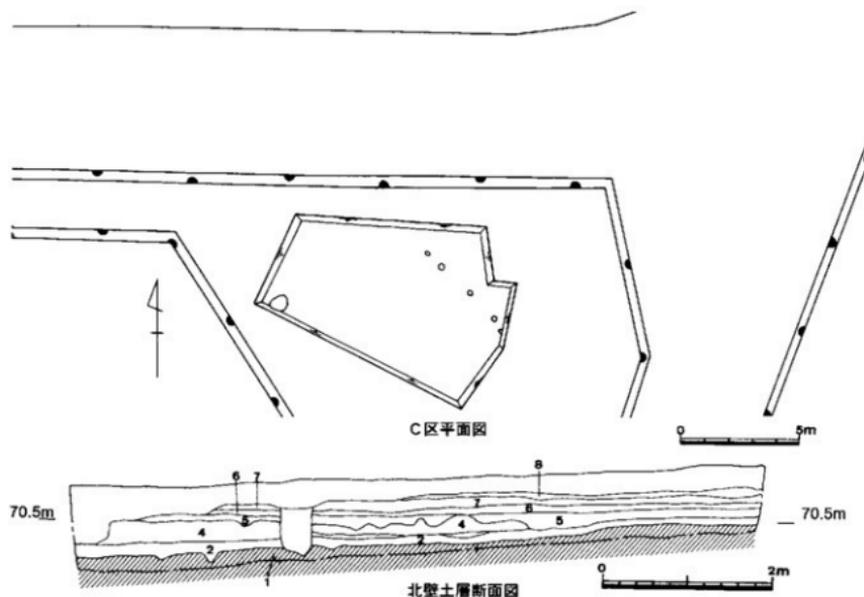
調査期間 平成12年6月26日～30日

### 土層

壁面に現れた土層は、このC調査区の後で発掘調査したA・B調査区で検出した調査区壁面土層とほぼ同じ様相を呈している。紙面の都合上A調査区で記述する。

### 遺構

C調査区では、遺物の検出はなく、数個の杭穴と遺物を全く含まない不明土壌SK1以外に目立った遺構は検出できなかった。



1. 10YR 7/6 明黄褐色 粘質土 (地山)
2. 2.5 Y 5/2 暗灰黄色 砂質土 (マンガン斑多い 中世層)
3. 2.5 Y 6/2 灰黄色 砂質土
4. 10YR 6/4 にぶい黄橙色 砂質土 (床土系)
5. 10YR 7/4 灰黄褐色 砂質土 (耕作土系 中世包含層)
6. 2.5 Y 7/3 にぶい黄色 砂質土 (耕作土系 中世包含層)
7. 10YR 7/8 黄橙色 砂質土 (床土系)
8. 10YR 6/4 にぶい黄橙色 砂質土 (床土系)
9. 7.5YR 6/4 にぶい橙色 砂質土 (床土系)
10. 2.5 Y 5/1 黄灰色 砂質土 (旧耕作土)

### 第3節 A調査区

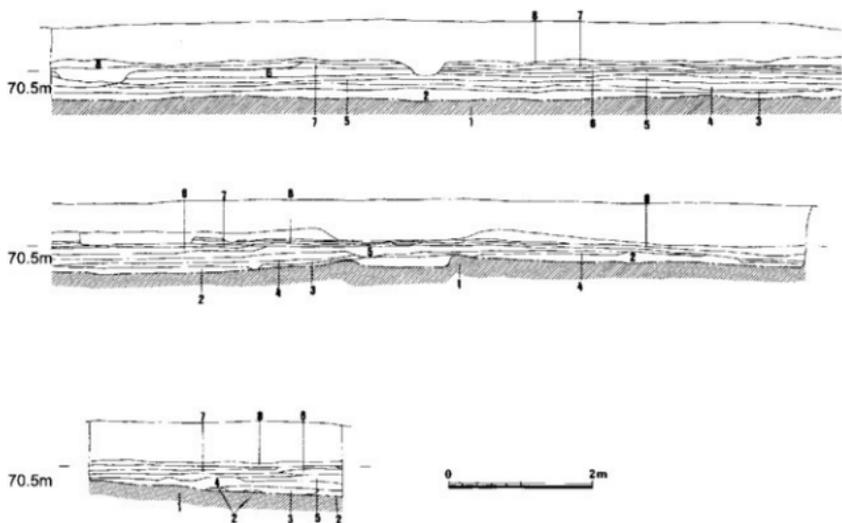
調査期間 平成12年7月17日～8月8日

#### 土層

A・B・C調査区共通で主に8種8段に分層することができる。最下層から上へ向かって記述する。A・B・C調査区とも地層はほぼ平行に堆積しており、検出された建物の遺構が実際に廃絶した後は脈々と安定した農地であったことが窺われる。

- ①10YR 7/6 明黄褐色 粘質土(地山)
- ②2.5Y 5/2 暗灰黄色 砂質土(黒っぽい土)
- ③10YR 5/4 にぶい黄褐色 砂質土 中世包含層(耕作土系)
- ④10YR 6/4 にぶい黄橙色 砂質土 中世包含層(耕作土系)
- ⑤10YR 6/2 灰黄褐色 砂質土 中世包含層(耕作土系)
- ⑥2.5Y 6/4 にぶい黄色 砂質土 近世頃の耕作土
- ⑦10YR 6/6 明黄褐色 砂質土 近現代の耕作土
- ⑧7.5YR 6/6 橙色 砂質土 攪乱土層

A・B・C調査区とも地山①の直上には黒っぽい砂質土②が存在する。中世期に開墾する際に盛土するなどして整地した土層であろうか。③層の耕作時の産物と考えられるマンガンの染込み・沈着が②層に観察される。





## 遺 構

遺構は多数の柱穴よりなる建物1基(SB1)である。

建物SB1を形成するのは、柱穴・ピット(SP)が138基、建物に付随する溝1条(SD1)、土壌2基(SK1:土間か?とSK2:井戸もしくは便所か?)である。

### 建物 (SB1)

A調査区中央部地山面上に多数の柱穴を検出することによって、考究される遺構である。A調査区内に確認できた柱穴は138基を数えた。柱穴が穿たれていない検出面を探す方が困難といった状況で、簡単に建物の平面形態を類推することは困難である。

柱穴どうしには切り合いも観られ、立替えが数度行われたことを示すものと考えられる。それらについて、柱穴1基の周囲には3~4基の柱穴が存在するといった複雑な並び形をする場合もあるが、SB1から少し離れて全体を見渡すとN10°W方向に並んでいることが判る。これらの柱穴には瓦器の破片を含むものがあり、中世の掘立柱と考えられる。調査区全体では古代の土師器も数点出土しているが、その次に古い遺物が14世紀前後時期のものであり、その間には大きな断絶がある。また柱穴の特徴から掘立柱には古代のものではなく、総て13世紀後半以降14世紀中盤までの数十年の間の所産であると思われる。

柱穴は総て同一平面状に一見不規則に配列されるような状況で検出をみたため、どの柱穴とどの柱穴が同時期の所産であるのかを、採取した平面実測図上に定規を当てたりして判定するのは難しいものであった。

建物SB1の形態がどのような変遷を辿ったのかを解明することこそが、この調査の醍醐味的な部分であるが、残念ながら現在のところ、柱穴の検出状況が余りに複雑であったために、創建期とその少し後の火災に遭った後の再建時期の併せて2時期(2通り)の形態が存在したことが窺うに過ぎない。

### 柱穴の検出状況から分類し、SB1の変遷を辿る

注意すべきところは、SB1の内部、特に柱穴の埋土に中世の焼土が残っている柱穴が存在することであった。その火災がいつどのようにして起きたのかは不明であるが、状況からして火災は一度だけ起きているようであり、この焼土を一種の鍵層として、その有無を観察すれば、不規則でわかりづらい柱穴をある程度時期毎に区別できるのではないかと。

柱穴の埋土は主に3通りに分けられる。

#### ①裏込め土 (掘り方として柱穴掘削同時に埋められた土)

- ①-a 焼土なし…柱穴掘削時に火災が起こっていなかったことを示す。
- ①-b 焼土あり…柱穴掘削時に既に火災が起こっていたことを示す。

#### ②柱抜き穴 (建替え時もしくは廃絶時に柱が抜き取られた後、埋め立てられた時の土)

- ②-a 焼土なし…建替え時もしくは建物SB1撤去時に火災が起こっていなかったことを示す。
- ②-b 焼土あり…建替え時もしくは建物SB1撤去時には既に火災が起こっていたことを示す。

### ③.柱そのものが腐った土(柱痕)

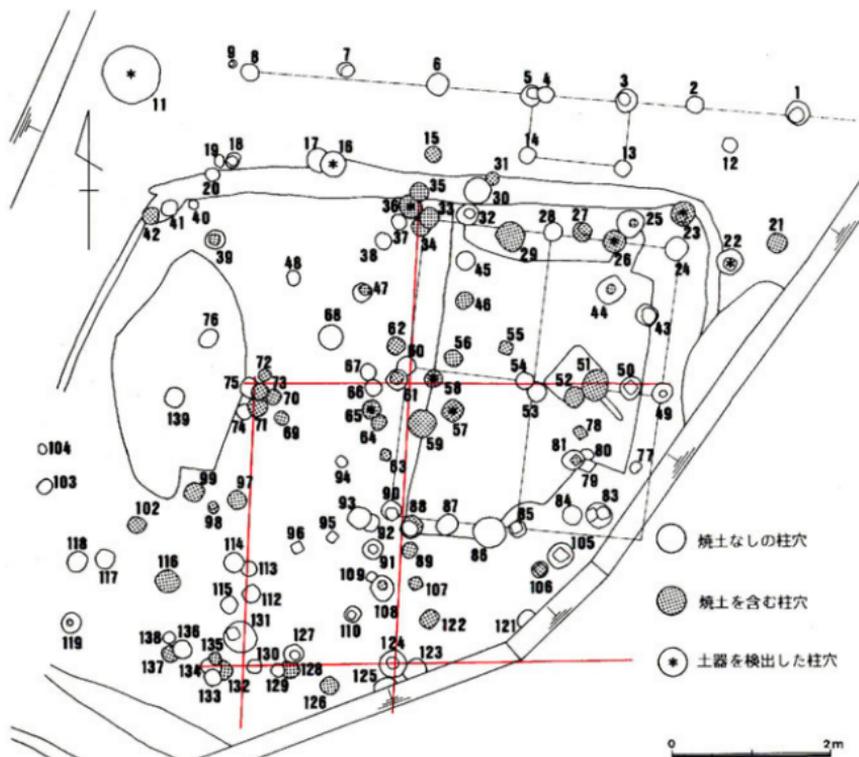
③について、柱痕と思われる個体は数点検出したが、例えばその横断面が四角形をして当時の建物の方向を示しているといった個体はなく、楕円状に観える程度の状況なので今回の考察には加えない。①と②の土に焼土が混じるaか、否bかに焦点を絞った。

●SB1には①-a～②-bの4種類すべての柱穴が存在していた。

●①-aと②-aについて、柱穴に焼土の形跡が全くないということは、SB1創建期～火災が起きる直前までの期間の遺構であることを示す。

①②の分類によって、全くわからなかった建物の平面形態とその変遷がある程度見えてきた。

現場で得た柱穴のデータを以下のSB1付近平面図にした。





またSB1には柱穴の他には主に土壌SK1、SK2、溝SD1といった3つの遺構も存在していたが、その埋土には焼土は一切含まれていなかった。これはつまりこの3つの遺構が建物SB1の焼失前のおそらく創建期の所産であることを示している。特にSK1、SD1と、上記の①-aと②-aで分類した焼上の混じらない柱穴は、明らかに関連のあることを示すような平面上の配列をみせており、SB1の創建期の様相がおぼろげにわかる。

創建期の建物SB1は、溝SD1を周囲に巡らせた東西2間、南北2間の規模の構造ではなかったか。(創建期のSB1は南北方向の1間約1.85m、東西方向の1間約1.65m) 創建時の柱穴と溝SD1は平面図のとおり切りあっていない。さらに溝の周囲には溝を囲むような位置に柵(SP1~8)を巡らせていたものと考えられる。SP1~8は深さがなく規模が小さい。建物SB1の東端(東壁)は、柱穴24-49……で、北端(北壁)は24-28-34(2間)で、32から南へ90°折り返して32-60-90(2間以上)の壁ができる。この東壁と溝SD1の間にはSK2が掘られたものと思われる。SK2の埋土には焼土・土器は全く観られない。

#### 土壌SK1

SB1の柱穴群の中に約12㎡の平面長方形の土質の異なる部分を検出した。深さは均一に約15cm程度で、埋土は灰色の砂質土1層である。この土壌SK1を取り囲むように柱穴が存在する。またSK1内にも柱穴が存在するが比較的深さが浅いものが多い。以上の観察結果から、SK1は創建期の建物SB1の土間的な施設であると考えられる。

#### 土壌SK2

創建時の建物SB1の北西端、つまり建物の屋根のかからぬ部分には土壌SK2がある。この土壌の平面形態は一辺約1.5m程度の不整四角形で、明らかに人為的な所産である。深さは約2mを計測した。埋土は茶褐色の有機物的な色相を示すが、今回遺構掘削時に湧水はなく、井戸であったとは考えにくい。また便所のような用途であったとも断定できない。またSE1は最後機械で完全に断ち割って底部を探查したが、遺物は全く検出なかった。あるいは井戸を掘りかけて、水が出ないために諦めて埋め戻したもので、後々雨水などが染み込むようになり、このSK2のみが周囲と異なった土色を呈するようになったものかもしれない。この埋土の上から掘立柱SP76・139が掘り込まれているのが確認されているので、建物SB1が建替えられていく課程で、埋め立てられたSK2は完全に忘却され、その上に建物SB1に関連する柱が建てられたものと思われる。

#### 溝SD1

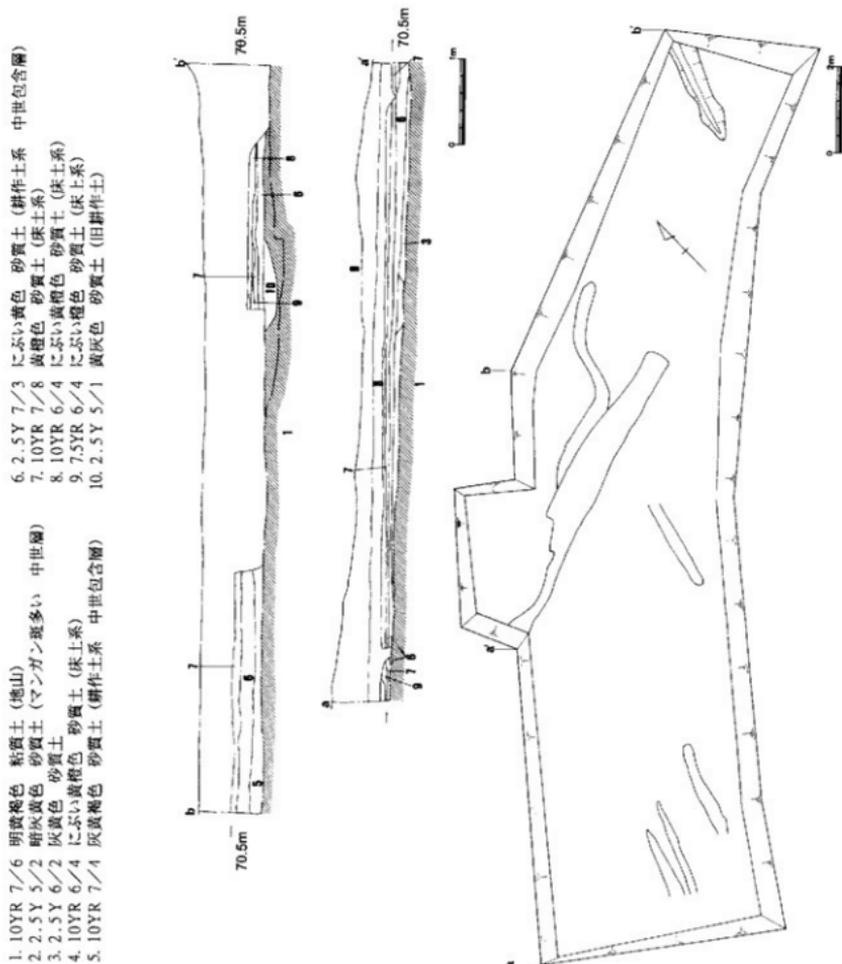
SD1は建物SB1と平行・垂直関係にあることから、建物SB1と緊密な施設(溝)であったと考えられる。断面は緩やかなV字状で、深さは検出面から10cm程度である。この種の溝は熊取町野田の東門寺跡の調査でも頻出するもので、過去に何度も検出している。埋土は灰色砂質土1層である。このSD1は建物SB1を長方形に囲んでおり、SD1の外側には柵列と思われるピットSP1~9以外には柱穴類は存在しない。SD1は柵列とともに建物の境界を区切りながら排水の機能をもった溝と思われるが、いわゆる雨落ち溝であるかどうかは現段階では不明である。

#### 第4節 B調査区

調査期間 平成12年8月9日～14日

#### 遺構

A調査区のすぐ北側に設定したB調査区では、建物跡などの目立った遺構は確認できなかった。これは調査で検出したB調査区の地山面が、近年の工場の建設工事等で大幅に削平されてしまったためであると考えられる。



## 第4章 遺物

瓦器	椀455、皿21、羽釜56、器種不明42	574
土師器	皿106、蛸壺1、椀2、甕2、土錘1、器種不明144	256
瓦	軒丸瓦1、丸瓦5、平瓦7	13
須恵器	甕2、高坏1、ハウ1	4
陶磁器	白磁椀2、青磁4	6
金属製品	不明2	2
不明の土製品片(焼けた土壁か)51		51
表採遺物	瓦器椀4、陶磁器10、須恵質壺1、瓦1、骨1、金属製品2	19
合計		925

※点数は接合前の破片(断片)の状態で計算

### 第1節 瓦器

#### ●瓦器椀

法量は口径がおよそ12~14cm程度、器高は2.7~3.5cm程度と低く、高台は断面が台形・三角形のものは少なく、偏平に潰れた断面の高台が大多数であったが、高台が全くない個体はなかった。この瓦器椀は尾上氏編年でIV-1期もしくはIV-2期に相当するものが多いものと思われる。他にももう少し大振りのⅢ-3期や、さらに小さなIV2期のものも含まれるようだが、小片・細片での検出であるため断定的ではない。

久保A遺跡00-1区出土の瓦器椀は、器壁が薄いものが大部分を占めるが、中には厚めのものである。前者として1・2・3・4・6・7。後者に5・8・10らがある。厚手の個体はⅢ-3期頃のものだろうか。11と12は高台部で、完全に高台が退化した形態でIV-1期~IV-2期のものである。

1は唯一の完形の瓦器椀で、高台が完全に矮小化している。器高も2.7cmと低い。見込みには渦巻状の暗文が見られる。内外面の焼成ムラが大きい。歪な重ね焼きの痕跡であろう。IV期のものであろう。

2は1とほぼ同様であるが、1よりも器高が高く、僅かに高台が大きい。

6は全体が赤色で、一見土師器に見えるが、2次焼成を受けた瓦器椀であろう。Ⅲ-3期か。

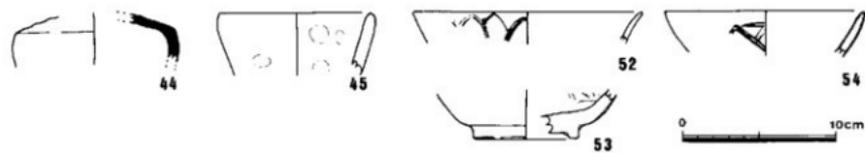
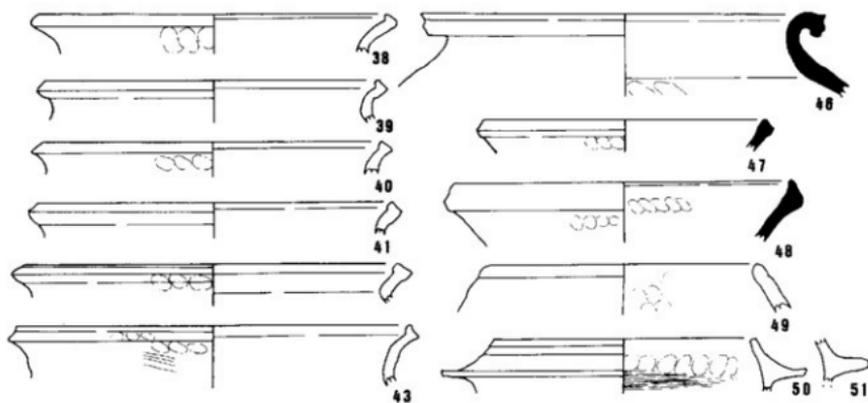
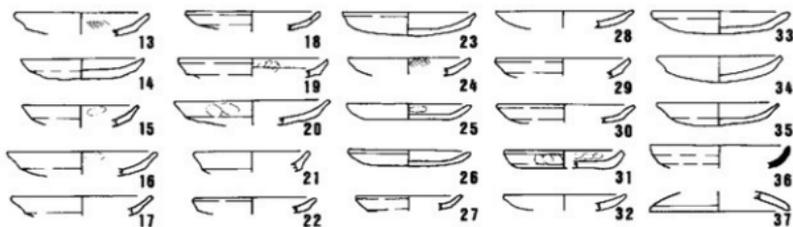
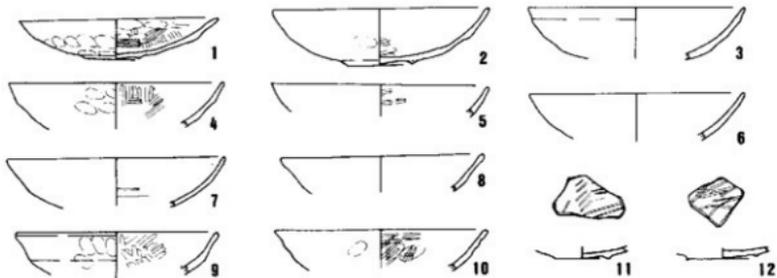
#### ●瓦器皿

口縁が指撫でによって外反するもの13・15・17・20と、内湾するもの14・18がある。口縁が外反するものは器壁が薄手で、内湾するものは厚手であることがわかる。

また口縁が外反するタイプのみならず2次焼成(おそらく火災)を受けた個体17・20が存在している。

#### ●羽釜

出土した羽釜の総てが瓦質のようである。実測可能な程の大きさの個体が少なかったが、



中でも49は厚手で口縁が内湾し、外面口縁部に細い沈線1条が巡る特徴があり、一般的な羽釜とは異質である。50は一般的な羽釜で口縁端部外面に沈線が2条巡っている。2次焼成の痕跡が著しく、羽釜の使用によるものか、被災したものかは不明である。

#### ● 甕

45は口縁を上にして徐々に開く、逆ラッパ状で、古代の製塩土器のような形状をしている。器壁は薄手で、2次焼成の痕跡はない。内外面の摩耗が見られる。胎土には砂粒が多く粗雑である。

### 第2節 土師器

#### ● 甕

今回の調査では古代の土師器が出土している(37~43)。37が蓋坏の蓋と思われる他はいずれも甕の口縁部分で、端部を外側上方へつまみあげている。これらは本町における発掘調査で散見されるもので、近年では久保城跡98-1区と七山東遺跡99-1区で同様の甕の口縁が出土している。また大久保E遺跡89・90-1区では土師器の甕が大量に出土しているが、それらは古墳時代初期の弥生第V様式の形態を強く残しているものである。今回久保A遺跡00-1区出土の個体は飛鳥期のものであろう。

#### ● 皿

中世の土師器の皿は橙褐色の色調を呈し、口径は約8cm程度である。器形は瓦器小皿に観られる外見的特徴と全く同様で、①口縁が外反して器壁が薄手の個体23・28・30・34・35と、②口縁が内湾して器壁が厚手の個体24・26・29・33と、③口縁が短く偏平で全体的に小ぶりの個体22・25・27・31・32に分けることもできる。③の個体(22・25・31)にのみ著しい2次焼成が観られる。

#### ● 蓋坏

37は古代の土師器の蓋坏の蓋と考えられる。2次焼成を受けたらしく変色し、表面は変形している。

### 第3節 須恵器

36は高坏の杯部で、小振りの碗形高坏であろう。

47・48はいわゆる東播磨の鉢である。48は玉縁の幅が広く、口径も大きい個体である。

47は玉縁の幅が狭く小振りである。

44は古代の須恵器で、ハツムしくは長頸壺の体部肩部分と思われる。

46は中世の大型の須恵質の甕である。口縁端部は回転させながら器具で器用に整形され垂れ下がっている。

### 第4節 陶磁器

53は龍泉窯系の青磁碗で、高台が高く、外面はおそらく無紋の個体で、やや緑褐色の渋目の発色などの特徴から、14~15世紀代の年代が与えられるだろう。内面には飛雲文や吉祥文などと呼ばれる蓮花文とは異なる文様が見られる。52と53も同時期の青磁碗で、体部

外面に蓮弁文がある。

## 第5節 出土遺物の遺構別の報告

### A調査区

[溝SD1] …瓦器碗破片3、土師器小皿破片3

溝SD1出土遺物は小片の土器ばかりで実測できるものはない。また二次焼成の痕跡は観られない。

[井戸SE1] …土師器小皿破片5、土師質羽釜破片3、瓦器碗破片1

井戸SE1出土遺物は破片ばかりで、実測できたのは31の土師器小皿である。また出土したのは、SE1の埋土の最上層で、その部分はSE1の遺構埋土とは断じ難い。SE1の中層～深層部からは遺物は一切出土していない。

[SP11]

SP11は建物SB1の柱穴ではない。ここからは割合多くの土器破片が検出された。この遺構の形状・大きさ出土遺物の須恵質の甕46からすると、ここには大型の須恵質の甕46が据えられていたのではないか。このSP11は甕の抜き取り穴状の遺構か。

[SP16] …瓦器碗破片2

いずれも小片で実測できない。二次焼成の痕跡も観られない。

[SP22] …瓦器碗完形1、土師器小皿完形1、土師器小皿破片3

瓦器碗1と土師器小皿35が重ねられた状態で出土した。SP22が小さいため、墓に伴う副葬品ではなく、呪いかもしれない単なる転落物であろう。

[SP23] …瓦器碗破片3、二次焼成を受けた土塊42

瓦器碗は小片で実測できない。SP23には赤褐色で土師質土器片のような粗粒の土塊が多くあったが、観察すると藁のような植物性の破片が混じっているのがわかる。薪をくべて常時二次焼成を受ける竈である可能性もあるが、火災で焼け爛れた壁土もしくは建物構成物の破片ではないだろうか。鎌倉～室町期の建物の構造を研究してみる必要がある。

[SP26] …瓦器碗破片6、土師器小皿破片2、土師器羽釜破片2、二次焼成を受けた土塊4  
実測できたのは土師器小皿32の1点で、あとは小片である。SP23同様二次焼成を受けた土塊がある。

[SP36] …瓦器碗破片11、瓦器小皿破片1、土師器小皿破片7、土師質羽釜破片2

これらのうち瓦器碗破片3点と瓦器小皿1点は赤褐色化し二次焼成されている。

[SP57] …瓦器碗破片25、土師器小皿破片1、土師質羽釜破片1、古代土師器甕破片1、土塊1

瓦器碗片2点と土塊が二次焼成を受けて赤褐色化している。

[SP58] …瓦器碗破片3

小片のため実測できないが、二次焼成の痕跡は観られない。

[SP65] …瓦器碗破片1、土塊1

[SB1] …瓦器小皿破片1、土師器小皿破片1

これらは柱穴から出土したものではなく、SB1の範囲内の焼けた検出面上に検出されたもの

のである。

#### **B調査区**

[包含層]…須恵器ハケ破片1、須恵器壺破片1、瓦器碗破片10、瓦器小皿破片1、土師器小皿破片11、土師質羽釜3

B地区からの出土遺物は少ない。B地区には建物等の遺構がなかったことから自然な結果である。またB地区出土遺物には二次焼成の痕跡が観られない。A地区の火災を受けたと考えられる建物SB1から若干隔たっているためであろうか。

## 第5章 まとめ

### 第1節 まとめ

#### 遺構

- ①古代の遺構については未確認である。
- ②検出した遺構は全て中世のものである。
- ③合計約138基程の柱穴には若干の年代差があるものの、建物S B 1を構成しており、複雑な検出状況はS B 1の数度の立替えを示している。S B 1の創建から完全な廃絶までの正確な年数は不明であるが、出土土器の相対年代からは100年ももたなかったと観ている。
- ④柱穴群には焼土の混じらないものと混じるものがあり、焼土が全く観察できなかった柱穴を辿ることによって、建物S B 1の創建期の柱穴(24・28・34・53・60・85・90)だけは判別できたといえる。
- ⑤創建期の建物S B 1の最大規模は調査区外に及ぶため未確認であったが、調査区内ではほぼ正確に2間×2間が観察でき、創建期の柱穴8基(24・28・34・53・60・85・90)が囲むように長方形の土塼S K 1が検出された。S K 1は深さ約20cm程度掘り込まれており、土間的な用途が考えられる。またS B 1を取り囲むように溝S D 1が検出され、S B 1に付随する排水施設であるものと思われる。そのS D 1の北側に1列に柱穴群1～9が検出され、柵状の施設があったものと思われる。
- ⑥残念ながら創建期のS B 1の柱穴以外の大半の柱穴について、建替え後のS B 1の柱の配列がどのようなものであったかは現在未確認。
- ⑦建物S B 1は明らかに火災に遭っている。遺物の観察からその時期は14世紀に入る前であったと思われる。建物S B 1が火災を最後に完全に廃絶したことを示す遺物は観られなかった。S B 1は14世紀中盤に廃絶されたものと考えられるがその理由は不明である。

#### 遺物

- ⑧古代(おそらく奈良期)の須恵器と土師器甕の口縁38～43が出土していることから、調査地点付近は熊取町野田の東円寺跡での調査結果と同様、おそくとも奈良期には開発されたと考えられる。
- ⑨瓦器碗は大きく3種類に分かれて観える。器高が3.7cm前後の個体(2・3など)は尾上氏の編年でのIV-1期頃のもので、2.7cm前後の個体(1など)はIV-2期頃のもので考えられる。高台が残るものが検出できなかったが、器高は3.7cm以上で器壁の厚い個体はⅢ-3期頃のもので、2次焼成を受けているものがある。このⅢ-3期より古い瓦器碗はなく、建物S B 1の創建期を示すものであり、火災の時期も想定されるものといえる。また逆にIV-2期以降に続く時期を示す遺物もほとんど確認されていない状況で、建物S B 1の廃絶時期は14世紀中盤を超えない時期であったことを示していると思われる。

### 第2節 熊取の中世について

久保A遺跡での成果を考究する前には、熊取町の鎌倉～室町期について触れておかねばならないだろう。熊取町の中世を記した歴史史料は少ないが、以下に文献から中世の熊取を抽出して要約してみた。

## 13世紀

1234(天福2)年の官宣旨には既に熊取庄の名が見え、熊取に誰かの荘園が存在していたことがわかる。

## 14世紀

また1334(建武元)年紀州最大の武士団であったとされる湯浅党の構成員であったという**木本宗元**が前年の元弘の乱の恩賞で**熊取庄の地頭職**に補任されたことは判っている。その当時いわばよそ者であった**木本宗元**と、従来から熊取にいた熊取庄の荘官(悪党・沙汰人)高向善三貞茂とは訴訟問題になっており、新補地頭の混乱ぶりが伝わっている。熊取町五月ヶ丘の丘陵上には1337(建武4)年に建立された「建武地蔵」と呼ばれる石造物が小堂に安置されている。陰刻される銘文には「**熊取庄阿闍梨( )方**」とある。この阿闍梨が誰であるのかは全く不明であるが、この地蔵がある五月ヶ丘の周辺に住んだ有力者に違いない。その後南朝の楠木正儀が1369(応安2)年和泉・河内両国の守護に補任されると、その配下の**橋本正督**が熊取に赴任し、熊取南部の**雨山**に城郭を築いて熊取一帯を支配したとされる。久保A遺跡と雨山城は直線距離で約3kmあるが、古来からの熊取の中心地域であると思われる大久保地域や野田地域よりは雨山城に近く、雨山を下ってまず熊取の平地部に入るのが久保A遺跡のある久保地域であり、雨山城の山麓にあたる。従ってこの久保地域は中世には軍事上重要な位置にあったことが考えられる。1379(永和5)年有力守護の山名義理・氏清が土丸・雨山城を攻撃し、橋本正督は討死にした。また1391(明德2)年その山名氏も大内氏に敗北し、熊取は大内氏の支配を受けた。先述した久保A遺跡の東背後にある高倉山に築かれたという高歳寺城は大内氏の被官が在城したとされる。また大内氏も1399(応永9)年応永の乱で敗れ、数年後には細川氏の支配下となるなど、14世紀の後半は熊取全域が戦乱の渦中に巻き込まれ、支配者がめまぐるしく交代し混乱したようである。

## 15～16世紀

15世紀から16世紀中盤まで**細川氏**の支配下となり、**被官行松氏**が小垣内で政務にあたったという。この頃の熊取は行松氏と和歌山北部山中に拠点のあった**根来寺**の2大勢力によって二分されており、頻繁に小競り合いがあり、行松氏の館も度々放火されたという。この時期戦火によって類焼する村もあったであろう。行松氏は16世紀半ば細川氏の衰退とともに熊取を退去したとされている。熊取町で中世期の発掘をする際には、特に14世紀～16世紀の間の戦乱を念頭におく必要がある。

## 第3節 考察

最も古い瓦器碗が尾上氏編年Ⅲ-3期ないしⅢ-4期頃のもので、それらのうち数個体が2次焼成を受けていること、そしてその次の時期の尾上氏編年Ⅳ-1～Ⅳ-2期の偏平な瓦器碗の破片群には一切2次焼成の痕跡が観られないことから、13世紀の後半から終盤に建物SB1は火災により焼失したと考えるべきであろう。

SB1は出土遺物から13世紀中盤頃の鎌倉時代に創建されたものと思われるが、残念ながら建物SB1の創建時期の13世紀中頃の熊取を記した文献は存在していない。木本宗元が地頭として赴任したのは1334年であり、それ以前の熊取には誰かの荘園があったことぐ

らいしかわかっていない。その鎌倉時代にこの建物SB1は創建され、まもなく焼失したと考えられる。それが単なる失火であったのか、あるいはなんらかの戦乱の被害であったのか現時点で究明することは難しい。

熊取町野田の熊取町役場前に存在していたとされる旧東円寺では、その独自の蓮華文軒丸瓦も著しく2次焼成を受けて焼け爛れた状態で検出されており、14世紀代には寺院として完全に衰退していることから、熊取の広い範囲で大きな火災を伴うような事件が13世紀の末か14世紀の初期に起こったのではないかと一考する。

またSB1は焼失後も同じ場所に建て替えられていることから、元々住んでいた人々が復興したのか、或いは他所からの入植者がいたものと思われる。

#### 第4節 備考

##### 久保A遺跡00-1区出土瓦器椀

久保A遺跡00-1区出土の瓦器椀は、熊取町の中世土器を研究する上で指標となった。

瓦器椀1と2の高台は著しく退化しており、貧弱な輪状の粘土紐一本を接着した程度で、断面は押しつぶされた山状である。またこの高台の粘土紐について瓦器椀の外底面への接着の仕方に特徴がある個体が数点検出された。高台として一本の粘土紐を完全な輪状に巻いて接着するのではなく、粘土紐の両端の間を約0.8cm程隔てて、U字状に設えている。この特徴は熊取町野田の東円寺跡などで検出された瓦器椀にも認められる特徴である。これは①単に製作者の性的なものなのか、②高台の一部を欠くことによって瓦器椀の使用上なんらかの利点があったのか、③他に何か意味があったのか不明である。

この瓦器椀1・2の見込の暗文は渦巻き状で、口径約12cm大、高さ約2.5～3.0cmの法量を測り、尾上編年IV-1～2期相当である。西暦上ではおよそ1300年前後から1350年までの間だろう。



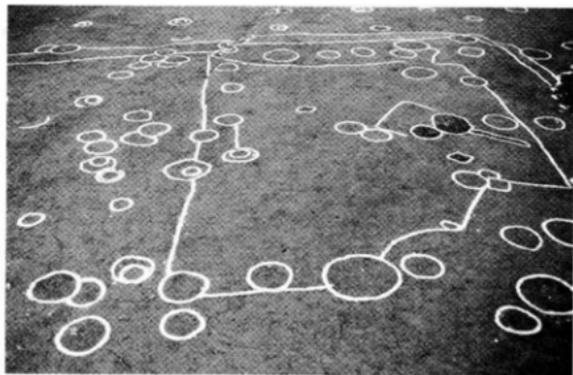
久保A遺跡00-1区 調査区A 全景



久保A遺跡00-1区 調査区A 西壁



建物SB1 検出状況



土坑SK1 周辺



柱穴断面 SP 21



柱穴断面 SP 22



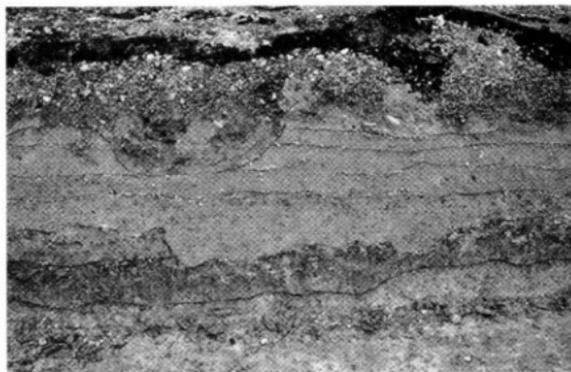
調査区B 全景



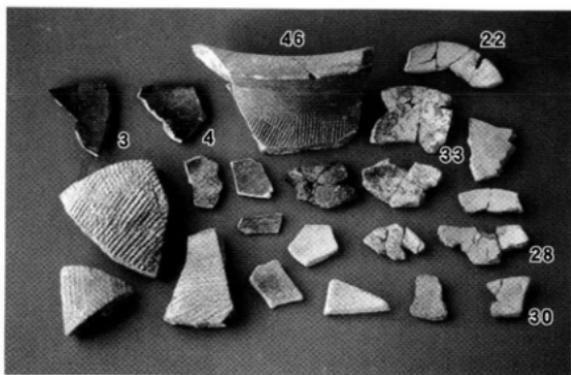
調査区B 西壁



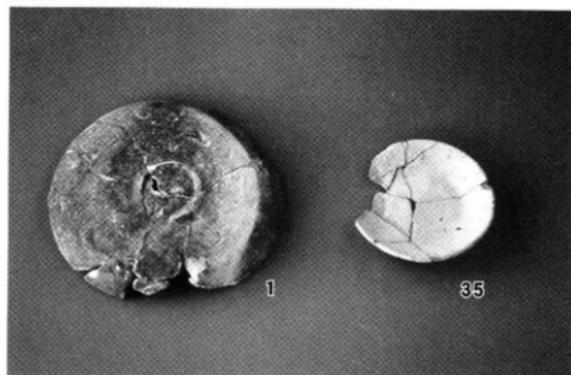
調査区C 全景



調査区C 北壁



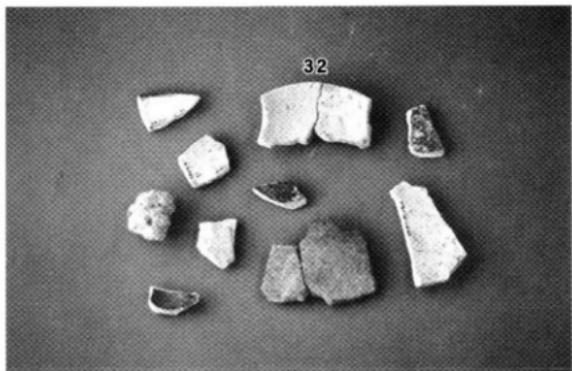
SP 1 1 出土遺物



SP 2 2 出土遺物



SP 2 3 出土遺物



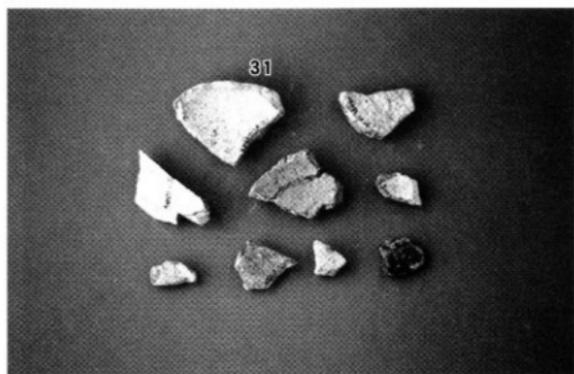
SP 2 6 出土遺物



SP 36 出土遺物



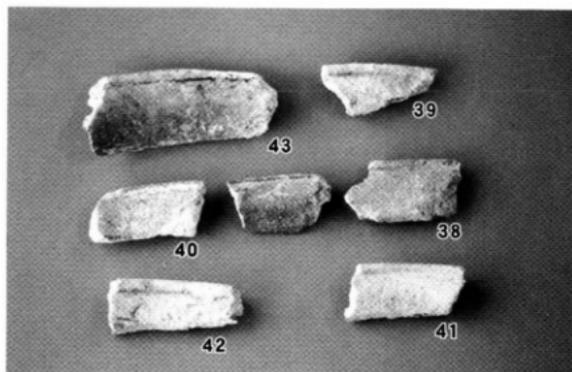
SP 57 出土遺物



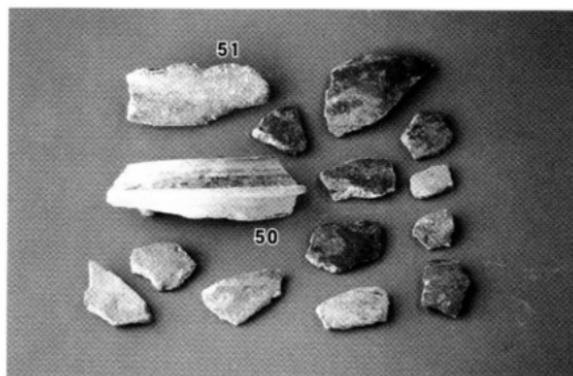
SK 2 出土遺物



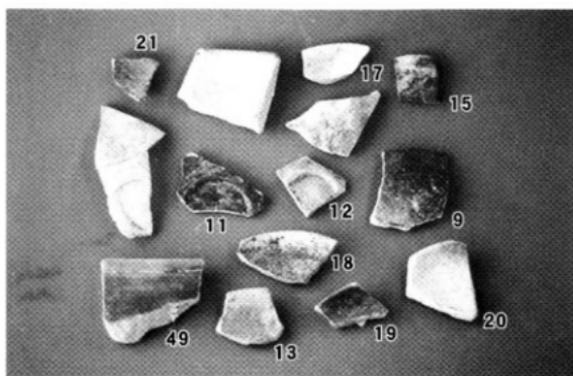
調査区B 出土遺物



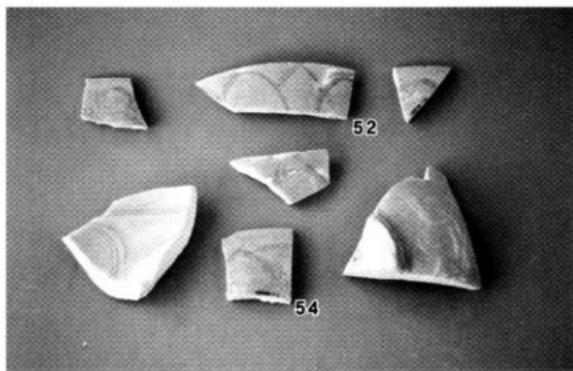
古代土師器



中世土師器



瓦器



青磁

# 報告書抄録

ふりがな	くぼAいせきはつくつちょうさがいようほうこくしよ							
書名	久保A遺跡発掘調査概要報告書							
巻次	I							
シリーズ名	熊取町埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第38集							
編著者名	前川 淳							
編集機関	熊取町教育委員会							
所在地	〒590-0495 大阪府泉南郡熊取町野田一丁目1番1号							
発行年月日	西暦 2002年3月							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査 期間	調査 面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
くぼA遺跡 久保A遺跡 00-1区	おおりのふやみなみへん 大阪府泉南郡  くまとりちょうくぼ 熊取町久保	27361	40	34°23'30"	135°22'33"	20010626  20010829	340.15	道路新設 町道小谷穴 釜線の設置
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
久保A遺跡 00-1区	集落	古墳～室町時代	建物・柱穴・溝・土壇	古代土師器・須恵器  瓦器・中世土師器・須恵器		室町中期の建物。  火災跡あり		

熊取町埋蔵文化財調査報告第38集

久保A遺跡発掘調査概要報告書・I

発行日 平成14年3月31日

編集・発行 熊取町教育委員会

大阪府泉南郡熊取町野山一丁目1番1号

印刷 泉南ムカイ精版印刷株式会社